

# 京鹿子

平成二十四年九月一日発行

9月号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その三十七

青 葉 風 つ れ て 川 筋 竹 屋 町

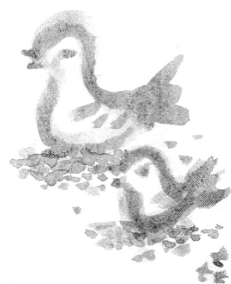
薰 風 の 勢 揃 ひ す る 二 の 丸 跡

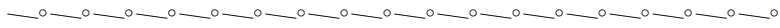
五 月 闇 た め 隅 櫓 守 る 乾

升 形 の 隅 は と か げ の 陣 な り き

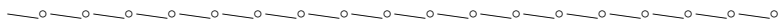
い つ ぱ い に 風 埋 め 青 葉 の 城 址 な る

虫 干 や つ が る る も の の な き 多 し



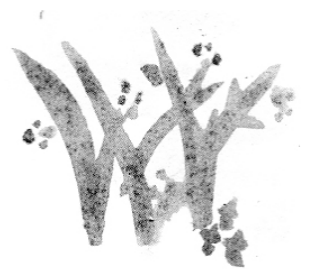


天牛のひげのそよりと森の午後  
天牛や切り捨てるものあれやこれ  
青葉木菟ひとつのとほき灯を得たり  
桐の花太筆書きに父のこと  
草引いてひぐれの庭と同化せり  
川風と鱧の皮に酌み灯をよべり  
坪庭の風にうちのはの和すひぐれ  
夕空へ灯かざり明日の鉾構



# 晚涼 丸山佳子

晚涼のホテルの碧き湯にしづむ  
ホルモンを打つ晚涼のやは肌  
に  
晚涼の鏡におしやれの眉を引く  
衣裁ちし小切五彩に秋近し  
月光のにじむ肩幅たのもしく



## 秀華採集

みだればこに着信音や夕立ち

河西 志帆

現在の情報量の多さ、その無駄を具体的に描き、特に注目したのは下四音。五音にして説明的にせず、一音の空白を置いて五音的に「夕立」を把握、一段と伝わらないことを納得させる。

木洩日や鍬ひかりに夏荒瀬

津野 洋子

農具庫を奥まで開き初燕

神崎 ひでこ

前句の「鍬ひかり」の形容は荒瀬の状態を鮮やかに写している。まさしくこれより外にない形容である。後句の、遠路の客の迎え方はたいへん心温まるものがある。

鈴鹿 仁

陶器市

言ひ種も才覚ひとつ陶器市

手花火のけふの思ひを零しゆく

日盛の真ん中をゆく救急車

だしぬけにももの毀れし大暑かな

神鈴や拵げし儘の白日傘

近 詠

和田 照海

烏 城

揚羽蝶烏城日和をただよへり

耳寄りな話烏城の蟻地獄

亀鳴いてそののち烏城ぐもりなる

発端は城の軒借る女郎蜘蛛

名園にかくし舟あり行々子

# 神麓集



金環日食 北村 香朗

金環日食支度おさおさ受入を  
金環日食過ぎてしまへば何の事  
昭和の日老んなの顔は老いにけり  
スカイツリー五月の空に希望持ち  
エレベーター次の緑をつき抜けて

居待月 竹貫 示虹

幾山河越えし秋風うしろより  
滴々を硯に垂らすのちの月  
一陣の風一面の蕎麦の花  
コスモスや頼れるものは何もなし  
逆縁や居待の月に濡れもして

花 梔子 藤岡 紫水

新美師寺にて  
彩褪せし十二神將梅雨の闇  
人生まれ人死す夕べ花梔子  
老鶯の二タこ糸あとは雨の音  
ここ木曾路馬子唄に和す雨蛙  
青嵐 一陣 なびく 草千里

暴れ梅雨 丹生をだまき

泥色の画面のニユース暴れ梅雨  
雨音に醒めて一人の梅雨の闇  
梅雨の闇四囲を圧して降りに降る  
梅雨出水無惨無惨と言ふ外無し  
奄美では梅雨明け京はざんざ降り

松田 都青

気がつかぬ間に垂直に來し立夏  
麦秋の中を走つてもう米寿  
菖蒲湯や正方形の空がある  
草笛に飽きし頃より大人なる  
齢老いし時間が通る五月闇

沙羅の花 柴田 朱美

生き残ることも修羅なり沙羅の花  
降り足らぬ空がのこりて沙羅満開  
径らしき径消え沙羅の花こぼる  
突然の雨にふるふる沙羅の花  
沙羅の花枢おが触れてこぼれけり

# 神麓集



夏衣丸井巴水  
首ながきをんなが急ぐ夏衣  
時の日や掘らば都の柱跡  
立ち疎む喪服は夏もダブルにて  
あをあをとその大声は雨乞ひか  
眼前にポトリ刺客の大毛虫

月涼し塩貝朱千  
千体の弥陀に捧げむ雪の峰  
海の日や波の響きはわが心音  
来ぬ人を待つ松が枝の月涼し  
カメラみな縦に構へて鉾が建つ  
地獄絵に火いろ血のいろ月涼し







# 京鹿子集

## 豊田都峰選

みだればこに着信音や夕立ち

上田 河西 志帆

きぬぎぬの白鷺さほど白くはなし

帰る鴨申し伝への陣構  
琴の音のフォルテツシモへ桜散る

たまくらの蜻蛉ひそめきて羽音

異文化を築しむ心杜若

アリソナ 伊吹 之博

すめらみこはたたかはず蓮見舟

来訪を指折り数へ杜若

木洩日や鏝ひかりに夏荒瀬

京都 津野 洋子

アルバムを開いて閉ぢて花の時

軒低き捨て家二戸蜘蛛の糸

苦も染も胸に仕舞ひて若葉風

花合歓や胸つき坂を登りきり

万緑や光と風の織りなすアート

オハイオ 水谷 直子

優曇華や納め傘塔婆の乱れ積

みつけたり母国と紛ふ紋白蝶

農具庫を奥まで開き初燕

大津 神崎ひでこ

驟雨去り薄日の中に刻とまる

力溜め一氣に開く桜かな

薫風に葉陰が見せる人の顔

巖島に潮満ち来たり春霞  
札幌 野村 鞆枝

黄雀の啄むさまのあどけなし

保育車に童四つたり青き踏む

桃の里保育園児は十一人

大輪のバラ名女優の名がまぶし

白牡丹大輪故のうなだるる

往診の途次柿の花隣家にも

夫婦してバラ園めぐりひと鉢買ふ

抱かれし嬰兒微笑や風薫る

軒の巢や到来待たるるつばくらめ

夏休み少年野球に少女あり

五月晴塀の上には猫眠る

天空に煌めくはガガの夏衣袈

紫陽花に幸さがさむと手を沈む

菖蒲湯に老年の臍洗ひけり

生命の発祥いづこ天の河

若葉若葉をんなの後ろ眩れてをり

蓑や笠やと白山吹の散りつづけ

咲ききりし紅薔薇一指怖れたる

土堤草の雨後をゆるゆる蛇下る

老いきつて母すみとほる青野かな  
嘶きがかたちとなりて青野くる

素手素足なぞりていつか木となるか

終はりかた教へる講座夏に入る

野仏の御手笑ましむ緑風

衣更ふ背のジツパーに立ち往生

予後のこと押印のこと新茶汲む

金曜日お酒少しと瓜揉みと

万緑の明るさにゐてにぎり飯

白鷺の水の静寂風立ちぬ

青胡桃スパンコールのやうな雨

ケエーンと鳴く鳥のゐて利根の朱夏

六月や手櫛で梳きし洗ひ髪

手を抜けと諭されてをり鮎を食む

みどりごの寢息河鹿の鳴く夜かな

青葉若葉のまん中をゆく黒き人

遠郭公鎮守の森に一会あり

夏草や遠き学舎の謡ひ声

明易し川の香ほのと座禅堂

睡蓮や波紋うかせて魚跳ねる

我が儘も夫のゐてこそ若菜風

夏はきぬエアロビクスに馴染まねば

抜けがらの烏賊釣船は夜を待つ  
至宝展いでて路地満つ著莪の花

布川 孝子

佐々木紗知

高野 春子

千葉 河内 桜人

さいたま 神田 惣介

伊藤 希眸

直江 裕子

浦安 安田 一郎

松戸 児玉 有希